

おにぎり太郎



著 白谷瑞希



目次

出会い	1
不思議	7
鬼退治	9
出生の秘密と鬼	12
おにぎりと欲とハグ	15
幸せとは?	18
カネコ	19
夢	20
学舎	21
ドリーム・ドリーマー	23
おわりに	25

出会い

昔々、ある処に、子宝に恵まれぬ、二人のお爺さんとお婆さんがいた。

二人の悩みは子宝に恵まれぬこと故に、命のバトンを次に渡せないことであった。

そして、それ故に二人は自信さえも失っていた。元来子供好きな性格の為、子供がないことは二人の孤独に拍車をかけていた。二人でいても、どこか寂しい、そんな孤独と子供が欲しい寂しさ。二人の孤独をなんと形容すればいいだろう。

お婆さんは歳といえども、色白などこかの聡明な女優かと思紛うかのような美しい女性である。お爺さんは容姿は整ってはいるが、どこか冷たい感の印象を受ける男性であった。

「子供が欲しいねえ…。」

今日も、お婆さんは呟いてしまう。

「んなこと言ったって、儂らはもう歳だ、諦めよう。なあ、婆さん」

それが、二人の毎日のやり取りであった。

ある朝、いつものようにお爺さんは芝刈りに、お婆さんは川に洗濯に行こうとしていたところである。二人が住んでいる瓦葺きの小さな家の裏側の井戸の中から声がする。

「ハグして…。ねえ、ハグしてよ…」

まだ小さな男の子のつたない声。お爺さんとお婆さんは耳を疑った。

井戸の中から？ まさか、そんなことが。

井戸は、近くの共同井戸を使わせてもらっているため、今は自宅の井戸は止めてある。

だから、空だし、誰かが万が一落ちてしまっても不思議はないのだが、声の主はまだまだ小さな男の子。

「寂しいよお。ねえ、ハグ！」

井戸に落ちて、普通は「助けて」なのであろうが、この声の主はしきりにハグというもののやらを求める。ハグとは一体なんなのであろう？

「なあ、婆さん。聞こえるか？」

突拍子もない出来事にお爺さんは顔をしかめた。

「え、ええ…。」

お婆さんも驚いてはいるが、それよりも可愛い声に耳を奪われる。

まずは、ハグというものよりも、人命救助が大切である。さっきから隣り近所の安兵衛や菊子が、朝の挨拶と共に家の前を通り過ぎていくが、朝の挨拶だけで、私たちに目もくれない。どうやらこの声が聞こえるのはわたしたち二人だけである。

「ねえ・・・ハグ・・・」

声はどんどん小さくなっていく。

助けるには今しか無い。

「お爺さん！ まずはこの子を助けますよ！」

「ええ～！？ なにをすればいいんじゃ？」

「まずは納戸からロープを持ってきて頂戴。わたしが降ります！」

慌てるお爺さんに、暗い井戸の中を覗いたお婆さんは、黄色の着物の袖の両腕をまくって近くにつりさげてあった紐で括った。

「わかったよ」

半分、焦る気持ちもあるが、人助けだ、相手は子供だ。不思議な感覚に包まれながら、お爺さんは納戸に駆け込んだ。埃臭い納戸にロープが二本。冬の様々な支度用にいつもしまっている。

お爺さんは二本のロープを掴んで、また慌ててお婆さんの元へと帰った。

キリリと眉を上げたお婆さんがこれまた美しかった。

ロープを二本渡すと、お婆さんは一本のロープを井戸に括り付け自分の体にそのロープの反対側を巻き付けると、もう一本のロープは口にくわえて、薄暗い井戸の中に降りていった。

「ねえ、早くしてよ…ハグ…」

この子は自分の命よりもハグというものが、大事らしい。
不思議に思いながら、井戸を草履を器用に使って降りていくと、そこにいた、いや、あったのは差し込む陽の光に眩しく光る、一個のおにぎりであった。

水の涸れた井戸の底で光る謎のおにぎり。
これを見てお爺さんとお婆さんは驚いた。声の主がいると思って慌てて井戸の底まで着物をたすき掛けまでして降りたのだ。狭い井戸を見廻しても、人間と思える存在の姿はない。

「来てくれたの？ ねえ、ハグ！ ハグしてよ！」

またもや聞こえる謎の声。お爺さんとお婆さんは自分の目と耳を疑った。
その声は目の前にある小さな変哲もないおにぎりから発せられたものだったからだ。

「ひえ～！！」

腰を抜かしそうになったお爺さんを、すんでのところではガッシと後ろにいたお婆さんが受け止めた。お爺さんは、カタカタと小刻みに震えている。

「なあ、婆さん…。おにぎりが喋ってるぞ…」

なおも、ハグというものを強請り続ける謎のおにぎりを、お婆さんは拾い上げた。
どこかで見たことのあるおにぎりだ。ちっとも怖くない。なぜだろう？

「あっ！！」

お婆さんは思い出した。これは、昨日お爺さんの為に予備に作っておいたものだ。
無くなっていたから、お爺さんが食べたものと勝手に思っていたが、そうか、なぜ驚きこそすれ怖くないのは、自分が作ったおにぎりだからか。
なぜ、喋るのかだけは理解できないが。

「ねえ、ハグってなあに？」

お婆さんは、おにぎりに優しく話しかけた。
お爺さんがぎょっとしたのはいうまでもない。

「なあ、やめとけ、そんななりして儂らを騙す鬼の手下かもしれん。」

最近、鬼の噂が広まっていた。なんでも、盗みや人間を狙って悪さをするらしいが、まだ誰も見たことがないため、真偽の程がわからぬ噂である。しかし、毎日米を作ったり農作業や生活をしていく上で、鬼という存在は噂だけでも充分人間たちを怯えさせた。

「なあ、婆さん…」

「黙っていてください」

お婆さんの肩を掴みかけたとき、お婆さんは凜とした芯のある声で言った。

「この子は鬼の妖術で、こんな姿にされているのかもしれませんが。そうしたら、他に助けるのは誰がいますか。私たちにしか、この子の声は聞こえないんですよ」

そう言って、また両手の平に載せたおにぎりにまた話しかけている。

「ハグったら決まってるじゃない。ぎゅーっとするの！ りゅー！」

「ぎゅー…？」

お婆さんは意味がわからない。勿論お爺さんも意味がわからなかった。

しかし、このおにぎりをぎゅーっと握ったのはお婆さんであるから、握り直せばよいのか。

「もう一遍握り直せばいいのかい？」

念のため、お婆さんが聞くとおにぎりは顔があるとすれば、頬あたりが薄ら赤く染まったように見えた。

「違うよ！ 人間の子供はしてもらえないじゃない。ぎゅーって…」

ああ、合点が即座にいった。もしかして、やはりこの子は人間なのだろうか。お婆さんの胸が痛んだ。お爺さんは困った表情でおろおろしている。

「でもねえ、あなたをぎゅーっとすると、その、潰れてしまわないかい？」

それが心配だ。話すということはこのおにぎりにも命が少なからずあるわけになる。

「大丈夫だよ！早くして。ぼく寂しくて死んでしまうよ…」

おにぎりに急かされて、お婆さんは腹を決めた。なんでこんな事態になったが知らないが、これは、元々は自分の作ったおにぎりだ。愛情をこめて握った一個のおにぎり。

魂が宿ってもなぜか不思議じゃない。古今東西そんな話が昔から溢れてるではないか。

「ぎゅー！」

お婆さんは、優しくおにぎりを胸に抱え、抱きしめた。

壊れないようにそっと。

でも、伝わるように強く。

「わぁ！ やっぱりハグっていいね。でもね、ひとりじゃ足りないみたいなんだ…」

お爺さんはドキリとした。

ただのおにぎりを抱きしめるなんて狂気染みている。しかも喋るおにぎり。本当に鬼の手下だったら、お婆さんはどうするつもりなのか。

そう思って、お婆さんをちらりと見て、またお爺さんは驚いた。

お婆さんの顔が光り輝いているー？

しかも、若々しく見えるのは気のせいかな。肌に、表情に若さが漲っているように見え、とても神々しく、美しい姿だった。

その瞬間、お爺さんもおにぎりをハグしていた。

お婆さんのように、そっと。そして強く。

その瞬間、お爺さんとお婆さんは自分たちの肉体も心も若返り、更に慈愛の心が広がっていくのを感じた。これは、味わったことのない感覚ー。しかし、酷く懐かしい…。

お爺さんとお婆さんが、ともに光り輝きながら一粒の涙を流したとき、おにぎりはなんと、突然人間の赤ん坊の姿になって、お婆さんとお爺さんの腕の中ですやすやと眠っていた。

不思議

繋ぐ命も見つからず、子宝にも恵まれなかった二人の老人は、突然なんという奇跡か人間の命を預かった。二人は大層喜んでこのおにぎりから生まれた人間の子供を育てることにした。名前は「太郎」。「喜一郎」など洒落た名前も考えたが、シンプルに一人の人間として愛するのに悩んだ結果、「太郎」にした。

勿論、喜一郎でも愛する覚悟はある。でも、なんかしっくりこない。お爺さんとお婆さんの心にやっぱり一番しっくりくるのが、「太郎」であった。

太郎を育てるためか、ハグした瞬間にお爺さんとお婆さんは若返った。おかげでお乳も与えることができた。太郎は可愛かった。くりくりとした目元にシュッと鼻先、愛らしいほっぺたと紅色の唇。太郎は女の子かと思ふ程、整った顔立ちの男の子だった。

なぜおにぎりから生まれたのか、わからない。そして、なぜお婆さんが握ったおにぎりがハグすることで人間になったのか。聞こうにも、太郎はおにぎりから生まれたと同時に人間になり、赤ちゃん言葉しか喋られなくなってしまったから、真相はもう誰もわからない。ただ、太郎に不思議な力があるのだけは解る。

でも、理由はもうどうでもよかった。

お爺さんとお婆さんは、おにぎり太郎をハグする度に力と慈悲の心が得られて、心が穏やかでいられた。突然、若々しく見えるようになった村人たちは二人を訝かしんだ。それでも、お爺さんとお婆さんは、太郎をハグする度に人の目に負けない強さを得られた。

ハグというのは不思議だった。太郎をハグする度に心に暖かいものが流れる。ときには涙も流してしまう程。そして、心が強くなるのだった。

全く不思議な子だ。お爺さんー正男という名だったが、正男は、今日も太郎と遊んでいるお婆さんー淑子といったーを見ていて思った。淑子は乳を与えるとすぐまたお婆さ

人の姿に戻る。正男もなぜか、仕事を終え、家でのんびりとしていると、お爺さんの姿に戻る。

朝、一番にハグするとまた若々しい二人に戻るのであった。村人たちの間では、二人が不治の病にかかったのだと本気で信じる者がいたのも訳がない。

でも、二人とも初めて太郎をハグしたときに、変わったものがあった。それは今でも変わらない。それは幸福感だった。満足感といってもいいのかもしれない。お金があろうとなかろうと、構わない。誰に嫌われようが構わない。見方が変わった。生きることが楽しくなった。人生がガラリと変わった。そのことは、太郎を育てるのに好都合だった。愛おしさが倍増したからだ。

どこか、冷たい印象だった正男が、太郎という存在を得て温かみのある人間に変わった。

今日も正男は、太郎をどう育てるべきか、考えている。一人の人間を人格として育て上げるのは大変だとわかっているが、それでも考えるのは正男と淑子に楽しみを与えた。太郎なら、二人が望むどんな子にも育ってくれそうな気さえした。

二人で話し合い、10歳まではなるべく褒めて伸ばすと決めた。元来淑子は褒め上手でもあった。しかし、人間の子供の育て方は、難しい。褒めたと思えば、同じ間違いをする。叱ったと思えば、今度は叱る前から乗り越えている。自分も親にどれだけ苦勞をかけて育てて貰ったのか、太郎を得て感ずるものがあった。

鬼退治

太郎はすくすくと、お爺さんとお婆さんの愛情とハグを受けて育ち、気づけば十五の歳になっていた。あどけない表情にどこか精悍さが漂っている。

晴れた朝だった。

「お爺さん、お婆さん、では行って参ります」

笑顔で太郎は声を張り上げた。そう、遂に村人たちを悩ませる鬼の退治に行くのだ。こんな日がかかるのはわかっていた。でも、育ててきた二人には止めることができない。まるでそれが宿命であるかのように。

「必ず帰ってくるんだよ」

「鬼に負けるな」

涙を目尻にいっぱい溜めて、お爺さんとお婆さんは太郎をぎゅっと強く抱き締めた。嬉しかった。しばらくハグはして貰えないだろう。それでもいい。太郎は少し強くなっていた。

太郎は二人に抱き締められて、ニカッと笑った。

さてさて始まってしまった鬼退治。

歩きながら、今まで調べてきた内容をざっと頭で反芻する。

鬼はどうやら、青鬼、赤鬼、黒鬼といるらしい。

暴れ回り、盗みを働き、怒りをぶちまけて発散する。

どうしたものか・・・武器はいるのか？

「清治郎おじさん、こんにちは」

武器らしきものを売っている清治郎さんの店に立ち寄る。清治郎さんのお店はいわゆる何でも屋だ。

「おう！ 太郎じゃないか。遂に今日行くのかい？」

清治郎は愛おしく太郎を見下ろした。

「はい！ このまま放っておく訳にはいきませんから」

ニカッと太郎が笑うと、つられて清治郎もニカッと笑った。

「まだ子供みたいな太郎にこんな仕事任せるわけにや、ほんとはいけねんだけどなあ」

ぽつんと呟く清治郎に、太郎は「もう子供じゃありません！」と怒ったフリをした。

「わかった、わかった、太郎。どんな武器がいい？ おじさんな、今日の日のために色々用意していたんだ」

やっぱり武器はいるのか……。

これから自分は鬼と戦うのだからな……。

まだ、どんなものか、わからない鬼という存在。噂ばかりで直接会ったことはないのだ。勿論怖い。

武器をいろいろと物色していると、清治郎が手作りで作ったと思われるのぼりを奥から持ってきた。『おにぎり太郎』と書いてある。

「おじさん、まさかこれ持って歩くの？」

「鬼退治と言えば鉄板だろう」

自慢げに清治郎はのぼりをひょいと空に掲げてみせた。

たなびくのぼり、なぜかおにぎりの絵付き。太郎はため息を吐いた。

「なんだ、そのため息は」

「いや、なんでもないです。おじさん、ありがとう」

「これは俺が一晩かけてだな……」

「わかった、わかった」

なんだか、笑えてきてあはは、と笑うと、おじさんも笑った。

「これにしとくよ」

冴えない丸い長い棒を手を取った。大きな武器は軽い体の自分には合わない。

おじさんは吃驚していたが、これでいいのだ。
殴られる鬼の痛みも考えた。できれば、対話で修めたかった。

のぼりを背中にさして、棒きれを買い、鬼のいるという山を目指す。
後ろを振り向くと、清治郎が手を振っていた。

出生の秘密と鬼

鬼がいるという山に着いたのは、真夜中だった。太郎はひとりでお付きの者など探さず、歩いてきた。腕に自信があるわけじゃない。まだまだ筋肉なんてものも、ひよっこの如くしかついてない。それでも、太郎を駆り立てたものはなんだったのだろう。

前から鬼に、興味はあった。
というか、自分の出生を知ったときに。

十四になったある晩、お爺さんとお婆さんはぼくを呼んだ。
二人の神妙な顔つきに、話がただ事じゃ無いことを察した。実際ただ事じゃなかった。まさか自分がおにぎりから生まれたなんて！

ぼくは泣いた。毎晩泣いた。なんで人間から生まれなかったんだろう…。
お爺さんとお婆さんの普通の子として生まれたかった。

そんな時に、鬼の乱暴が以前よりも激しくなった。隣り近所の村だけでなく、うちの村にも来るようになった。

そして、それはなぜか決まって夜なのである。不思議だった。
作物を荒らすのも、着物やら金品を盗んでいくのも夜。
太郎は聞いてみたくなった。
なぜ夜にひどいことを繰り返すのか。
そして、どこからきたのか。
なにから、生まれたのか。

おにぎりから生まれたと知って泣き叫ぶぼくを、毎日お爺さんとお婆さんはハグし続けた。
普通の人間の男の子みたいに。

「太郎の幸せがわたしの幸せ。太郎の悲しみはわたしの悲しみなのよ…」
毎晩あやしながら呟くお婆さんの言葉が胸に温かかった。お爺さんの涙も。
だから、ぼくはお爺さんもお婆さんも、だれも恨まないで済んだ。
そして、ハグをされると幸せな気持ちになって、いつの間にか眠っている自分がいた。

「なんだ？ お前は」

ドスの効いた声で、真上からした声に太郎は縮みあがった。

恐る恐る首が痛いくらいに上を見上げると、真っ青…じゃない青い鬼がいた。

豹柄パンツに二本の角。あー、思い描いたとおりの鬼さんだ…。

「あの一、夜分すみません。村に乱暴なことするのをやめてもらいたいです…」

水戸光圀公にも来て欲しかった。格さん、助さんにも…。助けてくれる人がいたら誰でもよかった。

夜の鬼の山の入り口にきたらしいが、凄まじい迫力だった。山は不気味な鳥が飛び回っているし、大きな鬼がうようよと酒盛りをしている。

「俺たちが荒らしたってのか？ あ？」

「どこに証拠があるってんだ？」

気づかぬうちに鬼は増えている。赤鬼、黒鬼、女性の鬼もいる。鬼たちはみんな豹柄の服装をしていた。期待を裏切らない鬼さんたちだ。

しかし、なぜ体の色が違うのだろう？ 顔まで体の色そのままだ。

「いいじゃない、坊や。なんで山に来たのかよくはわからないけど、一緒に飲みましょうよ」

そう女性の赤鬼が指さした先にあったもの…。それは近所の安兵衛さんの年代物のお酒だ。

お酒はまだ飲まないけど、おじさん達が集まって飲んでいたのを知っていた。

よくよく冷静になって見渡すと、そこら中うちの村からも近隣の村からも、盗んだものばかりだった。

「ここに証拠がある！ いっぱいある！ うちの村からもほかの村からも盗んだものばかりじゃないか！」

平和に穏便にいきたかったけど、つい、大声を張り上げてしまった。だって僕にとって村の人たちというのは家族みたいなものだったから。

「どうやら小僧…。この山から帰せそうにないみたいだな」

すると、とりわけ体のでかい黒鬼が口の端をにいと上げた。

おにぎりと欲とハグ

鬼たちの攻撃が始まって三十分は経っただろうか。

かわしてもかわしても、鬼たちの攻撃の威力は凄まじい。いつの間にか汗でぐっしょりだ。

自分にはとりわけ技もない。速さだけが取り柄だ。攻撃をかわして、鬼の肩間を棒で打つ。もう何回繰り返しただろう。鬼は一旦呻くものの、また力を倍増させて攻撃してくる。

どういうことだ…？ 竹と竹の間を斜めに走りながら、太郎は思案した。

攻撃するたびに、鬼の威力が増している。

そして、なぜか赤鬼、黒鬼が増えている。

滴り落ちる汗を拭いて、腹を決めた。こっちだって無傷じゃない。鬼からのパンチに傷だらけだ。

「ちょっとタンマ！！」

太郎は叫んだ。

「ちょっとタンマってわかる？ 休憩っていうか、考える時間っていうか…」

そう言っている間にも鬼の金棒が一振り。危ないところをひよいと避ける。

「とにかく、タンマ！！」

そう言って取り出したのは、お婆さんが作ってくれた特製おにぎりだ。今日はでかいし梅の味付きだ。どうにでもなれ。きっとぼくが来たのは間違いだった。鬼となんの話もできず、なんの解決もできず、このまま食べられちゃうんだ。

涙が出るけど、かまわず食べた。

「それ…なんだ？」

青鬼が攻撃をやめて尋ねてきた。

「お婆さんの特製おにぎりだよ。半分食べる？」

半分分けると、青鬼にそれを差し出した。

「俺らに、くれるのか…？」

おにぎりを頬張った青鬼は美味しそうな顔をした。

「なんだ、これ！ うめえ！」

それを見ていた他の鬼達も、おずおずと寄ってきた。

だから、まだあった残りのおにぎりを全部差し上げた。お爺さんから学んだことは、『分け与える幸せ』だ。ひとりで欲張るより、みんなで分けたら幸せになるよってお爺ちゃんによく言っていた。

鬼達は輪になっておにぎりを食べ始めた。食べられなかった鬼たちの体が青く変色していく。やっぱりー。

聞いたことがある。貪癡の鬼。貪は欲。もっともっととキリの無い欲の心。癡は怒り。欲を邪魔されたときにおこる怒りの心。痴は愚痴。怒りをじゃまされたときにおきてくるねたみや恨みの心。

「お前は幸せもんだなあ。こんな美味しいもの作ってくれる母さんがいて」

「そうよ、わたしなんて小さな頃に親に捨てられたのよ」

また体が青から黒に変色していく鬼たちに、太郎は両腕を伸ばした。

「あなたの幸せがわたしの幸せ。あなたの悲しみはわたしの悲しみ」

いつかのお婆さんの言葉が、胸に広がっていた。

小さな太郎にハグされた鬼の目が見開いた。

「アナタノ悲シミはワタシノ悲シミ…？」

ほかの鬼の動きが止まった。静止した空間でなんの音もしない。

「苦しんでいたんだよね？ ほんとは悲しかったんだよね？」

「夜を狙ってひどいことをしたのは、せめて迷惑をかけたくなかったからだよね？ 怯えさせたくなかった」

ひとりひとり、ぎゅっとハグをしていく。

そうすると、なんと鬼の体はいつしか青だけになり、その青鬼たちは涙を流し始めた。

「俺も…ただハグして欲しかった」

「抱き締めて欲しかった」

「子供みたいに」

その後ー。

鬼達は今までの過ちのお詫びとして、村人たちの畑を耕し水を汲み、率先して働くようになった。今度は昼間に。村人たちは、最初は太郎の連れ帰ってきた鬼達に怒ったり怯えたものの、ハグに飢えた反省した鬼達だと知らされると、喜んで鬼達をハグするのだった。鬼達は照れて笑った。

太郎は思った。

どこで、どうやって生まれたかなんて関係ない。

ただ、人が人を想う気持ちさえあれば。

人がおにぎりを想ったり、おにぎりが鬼を想ったり、鬼が人を想ったり。

そこに、優しさとハグがあればね。

さあ、今度は自分の中の鬼退治と一緒に幸せを見つけにいこう。

幸せとは？

幸せって一体なんだろう。

これから僕が探しに行くもの。

幸せって案外壊れやすくて、でも満足できて。

でも、長続きする幸せってあるのかな。

例えば、生きていてよかった！ と本当に思える幸せ。生まれてよかった！ と本当に思える幸せ。

僕はおにぎりから人間になった。

そのことを今でも喜べるかって言うと、まだなんだ。

だから、そんな幸せが本当にあるのかどうか、調べに行くんだ。

どこへ？

すべては心の旅さ。

これから色々な人たちに出逢って、そんな幸せがあるか、聞いてみようと思う。

どこに、どんな幸せがあるか、わからないからね。

因みに、お爺さんとお婆さんの家から出たんだ。今でも便りをくれるよ。返事を書いたら喜んでくれる。

今は、旅を始めたら、いろんな場所から鬼退治を頼まれて頑張ってる。それで生活しているんだ。

自分の中の鬼退治は難しいから、鬼の気持ちもわかる。でも、自分の中の鬼退治にまずは取り組まないと、何ひとつ進まない。

案外それが幸せにも繋がるのかもね。

というわけで、僕はまだまだ旅の途中ー。

カネコ

ある処にカネコという女がいた。カネコは名字だと思ふ人もあるだろう。違うのだ。金子金子。名字も名前もカネコという摩訶不思議な名前だった。なんでこんな名前になったかという、元々彼女は中国人で父母のうち母方が日本の生まれというのもあり、日本に帰化したいと思っていた。中国姓は金金子。日本人の名前にするあたりどんな名字がいいか父母と三人で考えたが、何回考えても中国籍名でもある金の入った金子という名字しか思いつかなかった。父母とともに泣いた。

申請が奇跡的に通り、彼女は金金子から金子金子になった。まだうら若い。黒いボブの髪に小ぶりの黒い瞳。黄色を思わせる肌。唇は綺麗なアーチを描く薄桃色だった。

彼女は日本人になってすぐ、大学に通うことにした。母方の叔父が日本のある会社の経営者で、費用を三分の二も賄ってくれることになったのだ。

彼女はもちろん喜んだ。日本の大学は自由そうで魅力的だった。どんな出逢いがあるか楽しみだった。

夢

金子が大学に通って三ヶ月が経とうとしていた。金子は案外早く周囲の子たちと馴染めた。周りの女の子たちは、金子のことをキムさんつまり金である一と呼んだ。まだ中国訛りが取れなかったからである。彼女はむしろそれを喜んだ。自分の名前を笑う者はいなかった。陰で言われているのかもしれないが、聞いたことがなかった。

日本の大学の校風は閉塞感がないところが気に入った。どんな発言も自由だった。大学に通いだしてから、彼女は夢を持つようになった。外国に学校を作る。幸い彼女は英語を話せたし、教師免許を取るための大学生活だった。彼女の専攻は小学校の教師になるためのコース。元来澆漓とした性格で子どもが大好きな金子であったから、あとに気になるのは中国訛りを直すことと、子どもたちにこのおかしな名前を受け入れて貰うことだけだと言えた。

夢を持つての学校生活ほど楽しいものはない。それも同じ夢を持つての一。

同じコースを選択している久保田幸と町田廉と仲良くなった。幸はさちと読み色白の全体的に色素の薄い女性だった。茶の髪も元からその色で生まれたという。どこか夢想家とも言える金子に対して幸はそのイメージと反して現実的な子だった。

町田は日本に来てから、初めて知り合った男の子だ。軽い訳ではないが話し始めるとぼんぼんとよく話す。彼は幸のことが好きらしかった。よく幸の方を見ている。私たちはこの三人で一緒に行動することが多かった。

この二人だけは、私のことをカネコと親しみを込めて名前と呼んだ。

私は実は町田のことが気になっていた。

学舎

幸と廉は喜んでカネコのイントネーションを直すのを手伝ってくれた。幸は標準語で廉はどことなく青森弁が時々顔を出したが、とにかく勉強になった。カネコはだんだん標準の日本語を使いこなせるようになっていった。

そんな私たちの学舎、つまり大学そのものが廃校になると決まったのはその一ヶ月後だった。代々赤字が続き財政も逼迫していたらしく、学校側も苦渋の決断だったという。普通なら学年度が終わるまで待つだろう。しかし、校舎は老朽化が進みいつ壊れても仕方ない状態だった。その中で財政困難。学校側も、やるべきことはやり尽くしたという。

人生に「まさか」という坂がある、と教えてくれたのは叔父だった。そのまさかが、この学舎で学ぶすべての生徒に襲いかかったのだった。

みんながなんらかの進路変更を余儀なくされた。教師を育てるこの学校で、学べることは大きかったが、違う大学に行こうと思ってもこの位レベルの高い学校を求めれば、海を渡らなければいけなかったからである。

幸と廉も進路について悩んでいた。しかも、悩む時間は限られている。勿論カネコもだ。外国に学校を作ることを考えたら、今のうちにレベルの高い教育を受けなければならない。教師として日本で働いてから、夢を実現させるのだ。その為にはどうしたらいい。

悩むカネコの脳裏に浮かぶのは、貧しくて学校に行けなかった祖国の農村の子どもたちのことだった。

「キンス、今日も勉強しているのかい？」

「うん。安いテキストを手に入れたから」

「おいらたちにも字を教えてくれよ」

「いいわよ」

故郷の可愛い弟妹のような子どもたち。自分もまだ子どもだったけれど、字や何かを彼等に教えるのは大好きだった。彼等はひとつ何かを習得する度に瞳に歓喜と自信が満ち満ちてくるのだった。

普段は農作業をし、空いた時間が少しでもあれば勉学に勤しむ子どもたち。カネコは十六歳にして、約十人の子どもたちを教えるのけた。カネコ自身もあの喜びを忘れてはいない。

なんとかするのだ。なんとか切り抜けるのだ。この状況を打破しなければー。

ドリーム・ドリーマー

そんな悩んでいるときにある曲に出逢った。題名は『ドリーム・ドリーマー』男性三人のユニットだった。

「ドリーム・ドリーマー
夢を見ようよ たとえ叶わない夢でも
見ることに意義がある だってそれは
永遠へと君を誘う 信じるかい？」

ドリーム・ドリーマー
夢を見ようよ 叶わないと諦めないで
願うことに意味がある だってそれは
覚めない明日へ 君を連れていく」

ダンスポップで動画アプリでも検索できたから誰もが見られるのだと思う。
有名な曲ではないらしい。幸と廉に試しに聞いてみたが、「知らない」という答えが返ってきた。
とにかく、この曲はカネコを慰めてくれた。夢を追うのは孤独だと多くのミュージシャンは歌うが、その通りだったから。けれど、この曲は夢追い人の背中を押してくれる。

諦めてもいいよ。でもすべきことをしてからだよ、と一。

幸と廉は進路変更をしだした。教師を諦め、幸はデパートの店員。廉はもうひとつの夢だった調理師を目指すことを考えているという。

勿論、海を渡って同じレベルの大学に編入を決めた子たちも大勢いた。学費の上に交通費が大きく上乗せされる子たちが殆どだろう。

しかし、カネコは違うことを、この学校の子たちが選ばないことを決断しようとしていた。

それは、中国への帰還。中国に戻り大学に入り、中国で子どもたちを教える。中国に新しい学校を建てたい。

希望を取り戻したカネコは、両親にそれを告げた。両親は大学の事情を分かっていたから、そちらの分は理解してくれた。しかし、中国での大学編入には大きく反対した。あんなに叔父さんによくしてもらっていたのに、日本で頑張る気はないのか。これまでの学費を水に流す気か。それにどうやって夢を追いかけるのか。これからの学費はどうなるのか一等等。

カネコは人生の設計図を既に立てていた。大学の授業料その他生活費を日本で稼ぐ。その上で何年かかるか分からないが、稼いだ金で中国に渡り、中国の大学へ入学し直す。

夢は願うことに意味がある。

両親は反対を諦め、叔父さんはカネコの計画を快く承諾してくれた。

そして、今カネコ。いやキム・キンスは祖国中国で大学の入試試験を受けようとしていた。

あれから十年。カネコは三十歳になっていた。その黒くつぶらな瞳の輝きは今も変わりはない。

おわりに

本書を執筆するにあたり、名前は伏せさせていただきますが、協力や応援をしてくださったすべての皆さまに感謝を込めて。

おにぎり太郎

著 白谷瑞希

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
